

学年最後の総まとめ 読むことの授業

～「ろくべえ まってろよ」の実践～

広島大学附属三原小学校

淵山 真悟

1. 実践の趣旨

子どもたちは、4月より多くの読むことの学習を行ってきた。物語や説明文を丁寧に扱って学習してきたが、学習がおのおので完結しており、つながりがなかった。様々な学習を蓄積してきた年度末にこそ、点の学びを線で結ぶ総まとめの学習が必要であると考えた。

また、これまで他者との学び合いを大切にして学習を進めてきたが、その効果を学習する子どもたち自身に感じさせることができていなかった。この二つの課題の克服を目指して平成24年2月に実践したものである。

2. 実践の概要

(1) 単元名 ばめんをそうぞうしよう 教材「ろくべえ まってろよ」(学校図書 1年下)

(2) 単元目標

- 新たな文章に出会ったときに、自力で読み解くための視点をもつことができるようになる。
- 文章の中の言葉から想像を広げ、楽しんで読むことができるようにする。
- 場面の様子を想像しながら音読をするために、自分の考えを発表したり、友だちの考えを受け止めたりすることができるようにする。
- 自己の読み取りの変化を感じて、学習の成果をまとめることができるようにする。

(3) 学習計画 (全12時間)

- | | | |
|-----|---------------------|-------|
| 第1次 | これまでの勉強をふり返ろう | 1時間 |
| 第2次 | 「ろくべえ まってろよ」を読もう | 8時間 |
| | ・学習計画を立て、学習の見通しをもとう | (1時間) |
| | ・全体をとらえて読もう | (1時間) |
| | ・場面ごとに読もう | (6時間) |
| 第3次 | 音読発表会を開こう | 3時間 |
| | ・音読発表会の練習をしよう | (2時間) |
| | ・音読発表会 | (1時間) |

(4) 手立てと授業の様子

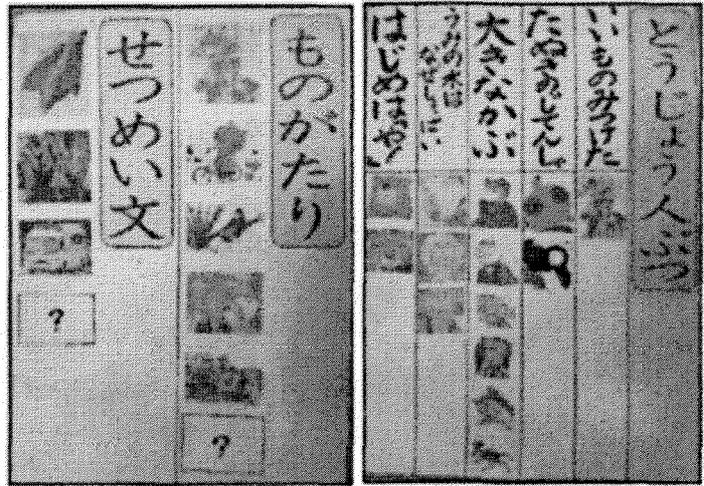
第1次 これまでの勉強をふり返ろう

新しい文章に出会ったときに自力で読み解くための視点をもつことができるように、これまでの読むことの学習を想起させ、それらを物語と説明文に分類させる。また物語の登場人物一覧作りを行わせる。

単元のはじめに、これまで学習したお話の題名を子どもたちに問い、4月から学習した多く

のお話を想起させた。その後、それらを2グループ（物語・説明文）に分類するために、物語と説明文の定義を確認した。子どもたちは、2グループに分類する際、言葉の定義だけではつかみにくいそれぞれの特徴を、具体例をもって確認し、物語と説明文の違いをとらえていた。

また子どもたちは、物語には登場人物が出てくることに気づき、これまで学習した物語に出てきた登場人物の一覧を作成した。その後、登場人物の定義を自分たちで作りに上げていった。最後に、これから学習する「ろくべえ まってろよ」は、物語か説明文か、登場人物は誰が出てくるのかを考えながら読んでいくことを教師から伝えた。



<物語・説明文の分類表>

<登場人物一覧>

第2次 「ろくべえ まってろよ」を読む

単元の最後に音読発表会を位置づけ、第2次では、それに向けて「ろくべえ まってろよ」を場面ごとに読み深めさせる。

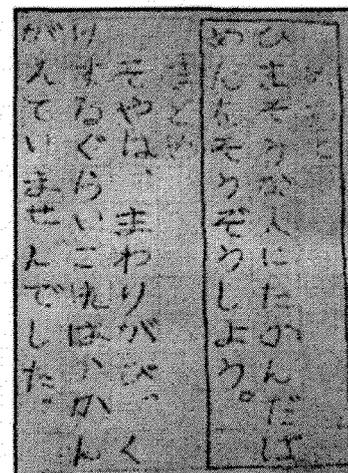
各場面を読み深めていく際には、「①登場人物の言動を文中より抜き出す」「②場面の様子を想像し、動作化するなどしてそれぞれの読みのイメージを交流する」「③交流で得たより明確なイメージを生かして音読する」という手順を、繰り返し行わせる。また自己の学びや変容を意識させるために、ノートにその時間の学びを書かせる。

全文から大切な言葉や場面の想像につながる言葉を見つけることは難しいと考え、登場人物の「5人の子ども(かんちゃん・みつおくん・えいじくん・しろくくん・みすずちゃん)」の言動に着目させた。子どもたちに、文中より5人の言動に関わる文章を抜き出させたが、それでもまだ数が多いことから、「音読する際に工夫できそうな文章」という視点を与えて着目する文章を絞り、それらを中心的に読み深めていくこととした。



<動作化をしている様子>

第1場面の学習は、「ろくべえ。がんばれ。」とえいじくんが大きな声で叫ぶ場面の様子について、それぞれの読みのイメージを動作化しながら発表させた。なお、動作化させる際には、教室前方にひな壇を用いて大きな穴をつくり、そこで発表させた。子どもたちは、穴の中に向かってしゃがんで叫んでいるのか、それとも頭を穴の中に入れて叫んでいるのか意見が分かれ、文中には描かれていない部分にまで想像を広げていた。その話し合いは、挿し絵に注目した子どもの発言で収まりをみせたが、これをきっかけに、第2場面以



<学びをまとめたノート>

降の学習でも、本文の言葉を根拠としながら、文中に書かれていない様子にまでに想像が及ぶようになっていった。5人の動きや表情、その場の雰囲気にも想像をふくらませる子どもが増え、読み取りや意見交流を楽しんでいるようであった。

意見交流の後は、必ず音読する時間を設定した。学習が進むにつれて、意見交流が活発となり、音読の工夫につながる気づきが多く出されるようになった。そして、友だちの音読を聞いて「上手」「すごい」という賞賛の声が多く聞かれるようになり、みんなの前で音読をしたいという子どもが増えていった。そのことで音読の時間がより有意義なものとなり、友だちの読み方の変化に気が付いたり、同じ文章を読んでも想像する場面の様子が変わったことを感じられたりする子どもが比例して増えていった。

また各場面の学習の最後には、交流で得た新たな学びをノートにまとめる活動を取り入れた。子どもたちは友だちの意見を自分の学びとして、ノートに記していた。

＜場面ごとに注目した登場人物の言動と交流による読みのイメージの変容＞

	主に注目した 登場人物の言動	交流による 読みのイメージの変容
①ろくべえを見つけた場面	「ろくべえ。がんばれ。」 えいじくんが、大きなこえでさげびました。	どんなかっこうでさげんでいるかまではかんがえていなかったけど、あたまをあなに入れているのだとおもう。
②おかあさんに助けを求めた場面	「けち。」 と、かんちゃんが口ごたえしました。	かんちゃんは、おかあさんたちをにらみながらいったのだとおもいます。
③ろくべえを元気づける場面	うたをうたいました。 きょうそうのようにして、シャボン玉をふきました。	ここで、うたをうたったり、シャボン玉をふいたりしたのは、げん気づけるためにやったことだと、わかりました。
④通りがかりの人に助けを求める場面	みんな口をきゅっとむすんで、あたまがいたくなるほどかんがえました。	なやんでいるかおをしています。 みんなすわりこんでかんがえているとおもいます。
⑤子どもたちがろくべえを助け出す場面	そろり、そろり。 そろり、そろり。 そろり、そろり。 そろり、そろり。	ゆっくり、おとさないようにかごをひっぱっているとおもっていたけど、早くたすけたいから、スピードははやいかもしれないとおもいました。

第3次 音読発表会を開こう

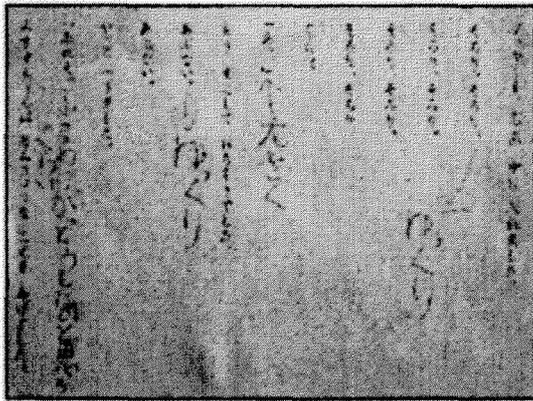
これまでの学習を生かして、音読の工夫を考えさせる。また小グループで練習を重ねさせた後に、全体で音読発表会を行わせる。発表会で音読する場面は、発表を聞く際に友だちの音読の工夫を見つけやすいように教師が指定し統一させる。

子どもたちは、単元を通して常に音読発表会を意識して学習を進めてきた。子どもたちには、それぞれ読みたい場面があるようであったが、音読の工夫を意識させ、互いに音読の評価をし

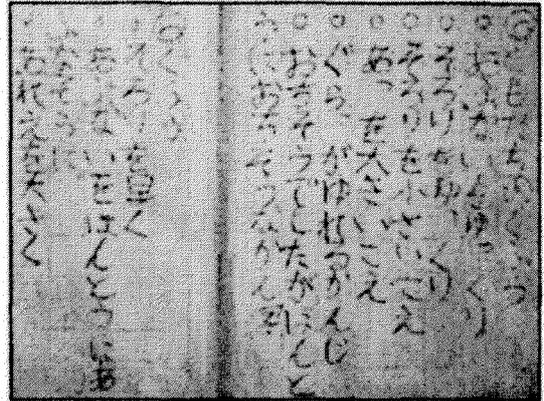
合えるように、読む場面は子どもたちの意見を取り入れつつ教師が第5場面の前半部に決めた。

子どもたちは、ワークシートに考えた音読の工夫を書き込み、音読発表会に向けて小グループで練習を重ねた後に、音読発表会に臨んだ。音読発表会は、「あっ。」の部分で大きい声で読む子どももいれば、息を呑むように小さい声で読む子どももいるなど、それぞれの読みのイメージの違いが音読に表れ、大いに盛り上がった。

また発表を聞くときは、友だちの音読の工夫を探しながら聞くように伝えた。子どもたちは、友だちの工夫をたくさん見つけてノートに書き込んでいた。強弱や速さだけでなく、明確な言葉では表せないが、「〇〇な感じ」「〇〇のように」などの言葉を使って友だちの音読の工夫を上手に見つけていた。



<音読発表会で行う工夫>



<友だちの音読を聞いて気づいた工夫>

3. 成果と課題

○成果 第1学年国語科の総復習を兼ねて学習を進めたことにより、子どもたちは物語と説明文の違いを明確にもち、登場人物のとらえもはっきりしたものとなった。また物語と説明文は教わった定義を手立てとして分類を行ったが、登場人物の学習では、子どもたち自身で定義づけすることができたことが、この取り組みの大きな成果であった。

他者との学び合いの有用性を感じさせるために行った動作化やノートへの学びの記述は大きな成果をあげた。特に意見交流の際に取り入れた動作化は、これまでも行っていたが、今回は予想に反して子どもたちの反応がよく、動作化が交流の手段の中心となった。ここまで動作化に抵抗なく取り組めた理由として、子どもたちの成長段階に合致したことと、場の設定があげられる。このことで、子どもたちは友だちの考えを聞く楽しさや、読みがより明確なものへと変わっていったことに気づくことができた。

●課題 他者と学び合いながら学習を進めていくことのよさを感じさせるために、友だちの意見に耳を傾ける時間を多く設定しようと心掛けた。しかし、振り返ってみると全体での意見交流がほとんどであった。そのため、様々な意見が飛び交いながらも、発表者に偏りが見られたほか、自己の変容が見えにくい子どもが数人生まれた。ペアでの学び合いや小グループでの学び合いを意図的に学習の流れに組み込むことで、これらの課題は解消されていくと考える。これから研究を進めていきたい。